

國學院大學学術情報リポジトリ

個別報告三 被災地の人々の力強さの源：
漁村でのフィールドワークから

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 筒井, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001049

《個別報告三》被災地の人々の力強さの源

― 漁村でのフィールドワークから ―

筒井 裕

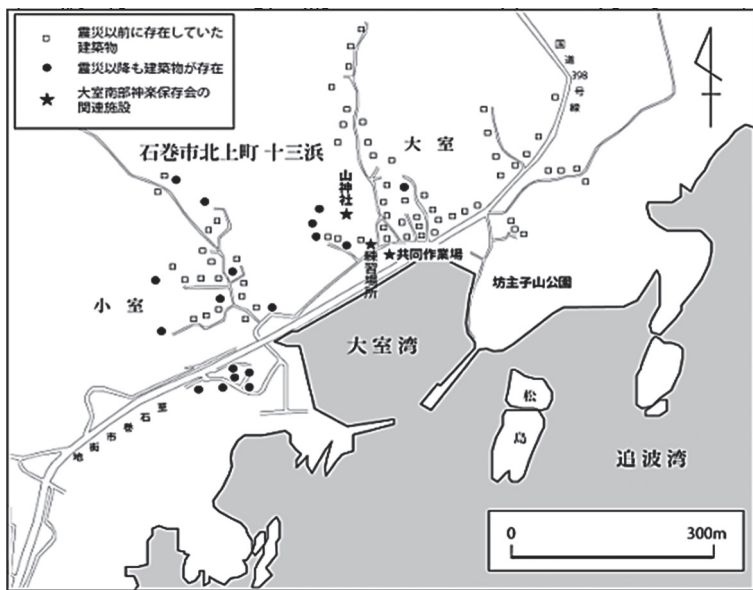
研究対象地域「宮城県石巻市大室集落」

帝京大学の筒井と申します。宜しくお願い致します。私の専門は人文地理学ですが、日本民俗学の研究もしております。本日は「被災地の人々の力強さの源―漁村でのフィールドワークから―」というテーマを設定させていただきました。今回は、平成二十五（二〇一三）―平成二十七（二〇一五）年にかけて実施した調査、ならびに、その後に行った調査の成果をもとに報告いたします。平成二十五（二〇一三）―平成二十七（二〇一五）年の調査の詳細につきましては、筒井 裕「東日本大震災の被災地における祭礼文化の「復活」とその要因―宮城県石巻市の大室南部神楽を事例として―」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』十号、一五一―一七一頁、二〇一六年）をご参照ください。



私の研究対象地域である宮城県石巻市大室集落は、仙台市から北東に直線距離でおよそ六十キロメートル離れた位置にある漁村です。平成二十九（二〇一七）年現在、この集落には二十五世帯が存在しますが、平成二十三（二〇一一）年の東日本大震災の前は、その倍の世帯が暮らしていました。【図 1】で示したように大室集落は海に面しています。東日本大震災の折に、この集落は巨大な津波に襲われて沢山の方が犠牲となり、家屋の九割以上を失うという大変いたましい経験をしました。

大室集落の主要な産業は、鮭・帆立・牡蠣・海藻類の養殖業ですが、東日本大震災後は放射能の風評被害の影響で収益が三割まで落ち込み、経済的に停滞した状況が続きました。【図 1】に、大室集落における東日本大震災以前とその後の家屋の分布状況を示しました。東日本大震災後に建築物の数が極めて少なくなっている事実から、地震と津波がこの地域をひどく破壊したことがわかります。



【図 1】 東日本大震災からの大室集落の復興状況（2008～2014 年）

（2008 年版・2014 年版『ゼンリン住宅地図 石巻市④』と現地調査の成果をもとに作成。
筒井（2016）より引用）

仙台市から北東に直線距離でおよそ六十キロメートル離れた位



写真 1



写真 2



写真 3

【写真 1～3】 東日本大震災前後の大室集落（2009～2018 年）

※Google Earth より引用。

【写真 1～3】は Google Earth の衛星画像で、東日本大震災前後の大室集落を写したものです。【写真 1】は、東日本大震災前の平成二十一（二〇〇九）年十一月十四日の大室集落の様子になります。続いて【写真 2】は東日本大震災直後の平成二十三（二〇一一）年四月六日のものになります。津波で家屋が流され、この漁村の日常が破壊されたことが把握できます。そして【写真 3】は平成三十（二〇一八）年二月十七日撮影の画像です。この写真の中央、やや右上の部分をご覧ください。土地が整備され、そこに住宅が建設されつつある様子がうかがえます。この場所が大室集落のいわゆる「高台」にあたり、先ほどお話しした二十五世帯の移住先になります。

大室南部神楽とその担い手

大正期以降、大室集落では庶民的で親しみやすい「大室南部神楽」が伝承されてきました。しかし、この神楽は平成七（一九九五）年頃に、「娯楽の多様化」などのために一度途絶してしまいます。その後、大室集落の人々は、東日本大震災の折に発生した津波によって、神楽に関するすべての知識・技術をもつ地域の古老「神楽の師匠」を失います。また同時に、神楽の奉納に必要な道具・衣装、そして神楽の台詞や所作を記した台本「神題本」も全て流失してしまいます。そのため、高齢者たちは「ウチの神楽、全部途絶えちゃった」・「神楽が完全に途絶してしまった。もう、やめちまおう」と意気消沈してしまいました。この様子を見た三十〜四十歳代の若手の皆さんが「高齢者たちを励まそう」と考え、神楽の復活を図りました。

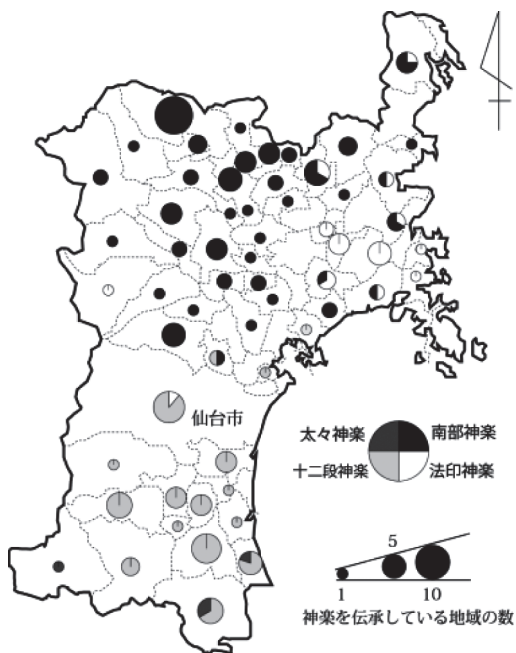
その際に、彼ら／彼女たちはFace bookなどのSNSを駆使して、日本全体に支援を呼びかけました（後述）。大室集落の若手の人々がこのような行動に出たのはなぜでしょうか。その背景には、後ほどご紹介する雄勝法印神楽とは異なり、大室南部神楽が文化財に登録されていなかったがゆえに、自ら情報発信をして外部の協力を取り付けなければ神楽を復活させることが叶わなかったという事情があります。

神楽の指導者と道具類を失ったにも関わらず、平成二十五（二〇一三）年五月、大室集落の人々は神楽の道具と台詞、そして生きる気持ちを取り戻し、「大室南部神楽保存会復活祭」を開催し、神楽を復活させました。その際に重要な役割を果たしたのは、先にお話した三十〜四十歳代の方々ですが、彼ら／彼女たちは津波の犠牲となった「神楽の師匠」から幼少期に「厳しい指導」を受けた最後の世代にあたります。現在、この若い方々が中心となり、男女二十名ほどで大室南部神楽保存会を組織し、精力的に活動を展開しています。

先程も申しましたように、大室集落の約半数の世帯が高台への移住を決めました。高台への転居は平成二十九（二〇一七）年の夏季には開始され、同年の冬にはおおよその世帯がこれを終える見込みで、ある高齢の方によると、「みんながようやく一息つける状態になった」とのことでした。この地に留まった人々の多くが、「神楽を継承するのだ」という強い気持ちをもつ大室南部神楽保存会の会員であります。

【図2】をご覧ください。この図は宮城県教育委員会編『宮城県の民俗芸能』（宮城県教育委員会、一九九三年）を基礎的資料として、宮城県における神楽の類型別分布を示したものです。黒色の部分が南部神楽の、白色部分が法印神楽の分布を表しています。【図2】より、仙台市の北側に南部神楽が、さらにその沿岸部を中心に法印神楽が伝わっていることがわかります。法印神楽は、「法印」「法印様」と呼ばれる修験者たちが伝えてきた神楽です。【写真4】は法印神楽のひとつで、国指定重要無形民俗文化財に登録された雄勝法印神楽の舞台を撮影したものです。これを見ると、舞台中央に「雄勝法印神楽」の文字や注連縄の意匠を施した幕が張られ、さらに様々な舞台装置が置かれていることがわかります。舞台の天井部分で木材を十字型に組んでいます。これは演出「産屋」で使用する重要な舞台装置のひとつです。「産屋」の奉納時に、こちらの天井部分に舞手の一人が逆さまにぶら下がった状態で激しく立ち回り、祭礼の場を大いに盛り上げます。また、左側に紅白の垂れ幕がありますが、これは演出「岩戸開」で用いられる舞台装置になります。このように法印神楽は舞台の一面を神楽幕で覆い、また、別の一面に舞台装置をしつらえることがあるため、観客は二方向、あるいは三方向から見学することになります。江戸時代に、庶民たちが「俺たちも法印様たちのように舞いたい」と憧れ、法印神楽をアレンジして創り出したのが南部神楽だといわれています（この経緯については、東北歴史博物館編『南部神楽に親しむ』東北歴史博物館、二〇一三年を参照）。以上申し上げた成立の経緯をもつがゆえに、法印神楽と南部神楽の面・衣装・楽器はよく似ているのです。

東日本大震災後、大室南部神楽保存会の会員たちは、石巻・多賀城・仙台市などの各地域に避難していた関係で、頻繁に練習することは困難を極めました。そのため、彼らは主に金曜日の夜など、決まった日時に大室集落に集い、練習に励みました。平成二十六（二〇一四）年以降、大室集落の出身者、あるいはその血縁者の子供が練習に参加するようになりました。その一方で、学業や就業の機会を求めて大室集落から他地域へ移住する人もありました。このような「人の出入り」が激しい状況下においても、大室南部神楽保存会の人々は、「神楽を奉納する姿を皆に見てもらうことが自分たちの励みになる」と考え、その継承に心血を注いでいるのです。



【図 2】 宮城県における神楽の分布とその類型（平成期）

（『宮城県の民俗芸能』をもとに作成。筒井（2006）より引用）



【写真 4】 雄勝法印神楽（2017 年、発表者撮影）

「屋島合戦」は、合戦中に重傷を負った兄弟が互いの姿を求めながら亡くなるという悲しい演目です。この演目を奉納する間、大室南部神楽保存会の舞手たちは感情が高ぶり、仮面の下でしばしば号泣するのだそうです。大室集落の人々は、自分たちの大らかでストレートな気質をはっきりと映し出す大室南部神楽を、「自分たちはいかなる存在であるのか」・「自分たちの個性とはどのようなものであるのか」という問いに答えを与えてくれる重要なものと認識し、「他の神楽に勝る、非常に優れたものだ」と位置づけています。そのため、会員たちは「神楽で他と優劣を争うべきではない」と考え、これまで、神楽のコンテストへの出場を禁忌視してきました。

以上から、大室南部神楽保存会の会員にとって、大室南部神楽とは「皆に見てもらうために頑張って練習する、生きがいになるもの」であり、「自身たちの個性を明確化し、自他の区別をもたせてくれるもの」だと言えます。

後継者の育成方法

一九九〇年代まで、大室南部神楽は、おもに水産業に従事する男性たちによって奉納されていました。彼らは毎日、未明から日中にかけて水産業関連の仕事に励み、これを終えた後に神楽小屋に赴き、そこで「神楽の師匠」の指導のもと、練習に勤しみました。師匠の指導は体育会系的な要素が強い、非常に厳しいものでした。例えば、師匠が、神楽小屋から二〇〇メートルほど離れた場所に舞手を立たせ、そこから舞手に神楽の台詞を大声で唱えさせましたが、舞手の声が神楽小屋にいる師匠のもとに届くまで、彼は神楽小屋に戻ることが許されなかったと言います。このような「厳しい指導」に耐え抜いた人だけが「正式な神楽の舞手」として認められ、最終的に地域の人々の注目を浴びるスターになったのです。大室南部神楽保存会の会員によると、昭和三十（一九五五）年頃には四十名の男性が神楽の練習に参加していましたが、最終的に、その数は二十五名にまで減少したそうです。

私は、大室集落の人々がこうした非常に厳しい神楽の練習を経験したことにより、大規模な自然災害を克服し得る屈強な精神力（ストレスへの耐性）と肉体を持つに至ったのではないかと考えています。これと同様の現象は、火山活動が盛んな東京都三宅島でも確認できます。なお、その点につきましては、筒井 裕「自然災害と共存する祭礼―東京都三宅島の初午祭を事例として―」（古沢広祐責任編集・國學院大學研究開発推進センター編『共存学3 復興・地域の創生リスク世界のゆくえ』弘文堂、六一―八〇頁所収、二〇一五年）で詳しく紹介しています。

大室南部神楽の復活の過程

平成二十四（二〇一二）年十一月、大室南部神楽保存会は、集落の復旧工事を担当した建設業者から仮設事務所の二階を練習場所として借り受けることができました。これをきっかけに集落内において、平成二十五（二〇一三）年五月に「大室南部神楽保存会復活祭」を開催しようという機運が高まりました。それは、会員の間で「大室集落が元氣になったことを全国の支援者たちに伝えたい、お礼を言いたい」という感情が高まっていたからでした。当時、会員たちは石巻市周辺に離散していたため、Facebook・LINE・携帯電話のメールを駆使して神楽に関する情報を共有したり、神楽の練習日時を調整しあったりするなどして、コミュニティを復興させていきました。先に紹介した三宅島の噴火時にも全島民が日本各地に離散しましたが、その当時、携帯電話が十分に普及していなかったこともあり、コミュニティの復興は著しく遅れることとなりました。

東日本大震災からあまり時間が経過しないうちに、大室集落の人々は祭礼文化を基盤に地域のネットワークを速やかに再構築しました。しかし、神楽の道具そのものだけではなく、これらの素材・構造・調整方法、さらに神楽の台詞（神題本）に関する情報を完全に喪失しており、神楽を奉納できる状態ではありませんでした。そこで、大室南部

財団・宗教団体より衣装の布地（写真5）や幕（写真6）の提供、ならびに、舞台の貸与などの支援を受けることができました。このようにして、大室集落の人々は「大室南部神楽保存会復活祭」で六つの演目を奉納する準備を着実に進めていったのです。

他地域との結びつきがもたらしたもの

高度経済成長期以前の大室集落の舞手たちは、自集落の産土社の祭礼のほかに、依頼があれば、塚浜（女川町）・志津川（南三陸町）でも神楽を奉納しました。しかし、東日本大震災をきっかけに、彼らの活動範囲は著しく拡大する



【写真5】 寄贈された布地でつくられた神楽の衣装（2013年、発表者撮影）



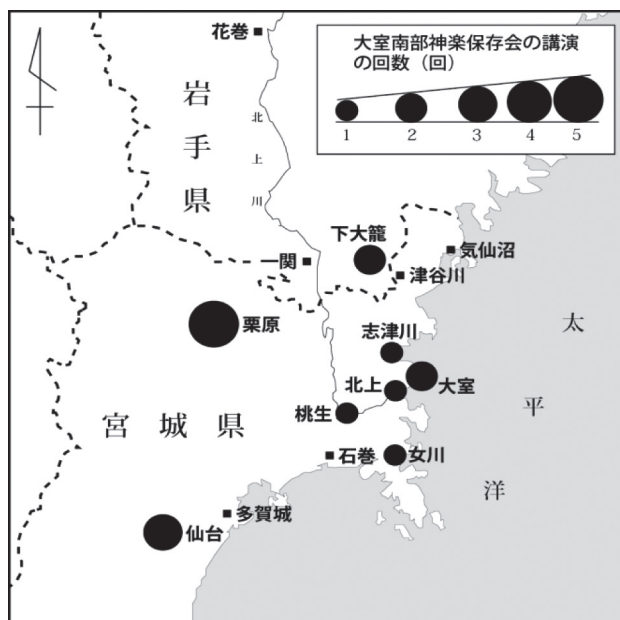
【写真6】 寄贈された神楽の幕を披露する大室南部神楽保存会の会員（2013年、発表者撮影）

神楽保存会の会員たちは岩手県から神奈川県にかけての地域で「フィールドワーク」を実施し、役場や神楽の専門家・関係者を訪問して大室南部神楽の道具や神題本に関する情報を収集し、これらを手掛かりに道具を新調したり、台詞の復元作業をしたりしました。また、大室集落が高い情報発信力を備えていたことから、日本各地の個人・企業・

ことになります。すなわち、東日本大震災以降、大室集落が岩手県下大籠・宮城県栗原市・宮城県仙台市などの住民・団体から神楽に関する支援を受けて人的交流が進むと、これらの地域が大室南部神楽保存会に神楽の奉納を相次いで依頼するようになったのです。【図3】に、平成二十五（二〇一三）―平成二十七（二〇一五）年における大室南部神楽保存会の神楽の奉納場所とその回数を示しました。この図から、同保存会の活動範囲が拡大したことが把握できると思います。さらに平成二十九（二〇一七）

年以降に実施した現地調査で、大室南部神楽保存会が東京都の国立劇場や兵庫県の湊川神社などでも神楽を奉納したことが明らかになりました。また、先程、少しふれた雄勝法印神楽においても、これと同様の現象が確認できました。この神楽は国境を越えて、ロシアで奉納されたことです（雄勝法印神楽の関係者への聞き取り調査による）。

大室集落の人々は、東日本大震災によって主要産業である漁業と生活文化（祭礼）に深刻なダメージを受けました。しかし、身体を酷使する漁業を生業とし、さらに「神楽の師匠」の厳しい指導を受けて、強い心身を育く



【図3】 大室南部神楽保存会の神楽の奉納場所と奉納回数

(2013年5月～2015年4月)

(大室南部神楽保存会に対する聞き取り調査、ならびに、同保存会 HP・Facebook をもとに作成。筒井 (2016) より引用)

んできた彼らは、「失ったはずの祭礼文化」を基盤として地域を復興させることに成功しました。ですが、近い将来、「神楽を学んだ子供たち」が、進学・就職のためにこの地域から転出することが見込まれています。今後、大室集落が「神楽の担い手」をどのように確保していくかが、大きな課題になっているのです（後述）。

総括

以上、お話をさせていただきましたように、大室集落の人々は、厳しい神楽の練習を通じて屈強な心身を培い、これを「底力」にして大規模な自然災害を乗り越えました。また、彼ら／彼女たちは南部神楽を伝承する中で、「自分たちは大らかで、朗らかで、ストレートな気質をもった人間なのだ」という認識を持つようになりました。この認識は自他を明確に区分して自立の精神を培い、能動的に活動する人材を育成する源になります。したがって、私は、もし、自然災害の常襲地帯である大室集落に神楽が伝わっていなければ、東日本大震災をきっかけに、この地域は衰退の一端を辿ったのではないかとすら考えます。

最後に大室南部神楽の「後継者問題」について言及させていただきました。平成二十九（二〇一七）年現在、大室南部神楽保存会は継続的に練習を行っていますが、「後継者問題」に直面しています。平成二十七（二〇一五）年当時、は八名の子供が神楽を練習していましたが、彼ら／彼女たちの一部が中学生になって部活動を始めたり、遠方の大学・専門学校へ進学したりした関係で、神楽の練習を続けることが難しくなりました（写真7）。彼ら／彼女たちの幸福の追求を妨げることなく、祭礼文化を継承するにはどうしたら良いのでしょうか。私は、三宅島神楽地区の獅子舞（初午祭）の事例がこの問題を解決するヒントの一つになるのではないかと考えています。最後に少しだけ、こちらを紹介させていただきます。

祭の継承に関する文化地理学的研究」平岡昭利監修・須山 聡ほか編『離島研究Ⅵ』海青社、一四三―一五六頁所収、二〇一八年）。



【写真 7】 大室南部神楽を奉納する子供たち

(2017 年、発表者撮影)

火山活動が活発な三宅島の神着地区の青年団は、平成十二(二〇〇〇)年の噴火以降、獅子舞の奉納に必要な人手が確保できず、頭を抱えていました。神着地区の青年団はこの状況を打破すべく、島内の公的機関や大企業の出張所に向向中の島外出身者とその家族を青年団に勧誘し、獅子舞と一緒に練習するようになりました。出向者は数年間で島を離れますが、これとほぼ同時に、新任者とその家族が転入してきます。神着地区ではこの出向という仕組みを巧みに活用し、祭礼に必要な人的資源を円滑に確保しているのです。大室集落をはじめとする被災地の人々が祭礼文化の継承を強く希望するのであれば、この事例を参考に他地域出身者を受け入れてみるのも一つの解決策になるのではないかと思います(本報告後、三宅島神着地区の事例に関する次の論考を公開した。筒井 裕「東京都三宅島神着における初年